

11月7日・8日の2日間にわたり、神戸国際会議場にて第64回日本生殖医学会学術講演会が開催されました。当院から奥院長、培養部11名が参加し、1演題ポスター発表をしました。

口頭発表、ポスター発表共に多くの演題数があり、両日共に早朝から密なスケジュールとなっております。今回の学会では関心が高まっている遺伝子検査に関する発表には部屋に収まらないくらい人が傍聴していました。また多血小板血漿を用いた治療、AIを組み込んだ装置開発の進行状況などの講演は大変興味深かったです。

AI技術は主に胚の観察や評価の分野で注目されてきましたが、新たに良好精子の選別のための技術開発がなされていきました。ICSIに用いる精子の選別は、培養士の主観によるものが多く、ラボ内であっても選別の認識を完全に共通することは難しいと言われてきました。精子判別の技術開発はラボ内の認識統一や、1つでも多くの良好胚ができることに繋がるに違いないと思いました。

技術の進歩は素晴らしいと思う一方、スマートホンの電波が精子の運動性や生存性に悪影響があるという報告もありました。技術の進化によって身体に受ける電磁波は多くなってきました。気づかないうちに悪影響を受けていることがあるので、今後電磁波を軽減する対策を考えていかなければと思いました。

最新技術開発の実際やラボの危機管理についてなど大変勉強になる内容がたくさんあり、今回本当に得るものが大きかったです。

ポスター発表した演題をご紹介します。『AMHとART臨床成績についての検討』

抗ミュラー管ホルモン(AMH)は卵巣予備能の指標として重要視されています。AMHの値が低値の場合、卵巣機能が低いことが考えられます。そこで卵巣機能が胚の質に与える影響を検討するために、当院においてAMHとARTの臨床成績を比較しました。AMHの値が臨床成績に影響を及ぼすものではないという結果から、卵巣機能が胚の質に与える影響はないことを示しました。

培養士 田中